Cure to Care　第 1 話

與儀　達朗

【登場人物】第1話

町田　翼（32）…救急医

鈴木　舞（32）（26）…訪問看護師

村井　正和（50）…訪問診療所院長

金城　恵（36）…訪問診療所職員

鈴木　健（52）…外科部長

八木　直久（50）…救命センター部長

新井　亮（29）…町田の後輩の救急医

高井　玲奈（30）…救命センター看護師

田中　徳次郎（85）…肺がん末期患者

田中　慶子（50）…徳次郎の長女

田中　良子（45）…徳次郎の次女

町田　亜由美（40）（55）…町田の母親

山田（29）…町田の後輩の救急医

島崎（30）…町田の後輩の救急医

救急隊員（22）…救急隊員

高齢患者A（92）…冒頭の搬送患者

高齢患者B（95）：搬送患者

訪問診療医（50）：TVのコメンテーター

覚知（50）：居酒屋の店主

森田（50）（35）：舞の当時の受け持ち患者

新人看護師（22）：救命救急センター所属

医師A：救命救急センター研修医

看護師A：集中治療室所属

医師B：集中治療室研修医

外科医A：外科部長鈴木の部下

外科医B：外科部長鈴木の部下

幼児（2）：森田の一人娘

ケン（50）：前田救命センター救急医

【あらすじ】第一話

救命救急センターで勤務する救急医の町田翼は後輩と共に、救急搬送されてくる高齢者の対応に明け暮れていた。いわゆる医療難民に加え、かかりつけも含めて急変時の治療コードが定まっていない患者が多く、町田や後輩の心身はすり減っていった。

ある日、外科部長主治医の肺がん末期の患者が呼吸不全で搬送されてくる。町田は苦渋の決断で人工呼吸器を患者に装着するが、救命のために施した処置に対して、患者の家族は崩れ落ち、鈴木からは救急医のエゴではないかと言われる。救命センター部長が取らせた休暇中に町田は鈴木舞と出会う。舞は、『医療が患者の人生を決める世界が当たり前だったと思うけど、彼らの人生で医療を決める世界もある』と訪問診療所の連絡先を町田へ渡すのであった。町田は、過去の記憶も思い出しながら、村井診療所の見学に赴く。

第一話「ミサンガ」

○幹線道路・（夜）

夜の街にサイレンが遠ざかる。ビルの灯りが、ふっと一つ、消える。

○救急車・車内（夜）

高齢男性A（92）の胸に、若い救急隊員（22）の手のひらが沈み込む。規則的な圧迫の音の後に、心電図モニターのフラットな電子音。救急隊員の額に汗が滲んでいる。

町田N「人を救うことが、僕の仕事だ。一秒でも速く。一分でも早く。そう、教えられてきた」

町田N「――助けることが、傷つけることもあると、誰も、教えてはくれなかった」

○前田救命センター・初療室前（夜）

救急車が滑り込み、ストレッチャーで

高齢男性Ａが運び出される。

○同・初療室（夜）

救急隊員「搬送依頼の患者さんです、心肺停止、ＣＰＲ継続中！」

医師Ａ「こっちのベッドへ！」

ストレッチャーからベッドに移される高齢男性Ａ。研修医Ａが患者の胸骨圧迫を引き継ぐ。足元では、新井亮（２９）が骨髄針を患者に刺している。

患者の頭側に立つ町田翼（３２）。喉頭鏡を握る、その左手首には色褪せた赤いミサンガ。手は震えていない。

喉頭鏡を入れようとして、町田の手がほんの一瞬止まる。患者の顔が、町田の視界に入ってくる。白髪、深く刻まれた皺、歳月を生き抜いた顔。

＊＊＊

（フラッシュ）

酸素マスクの下、苦しげに呼吸する亜由美。荒れた手首に、結ばれたばかりの赤いミサンガ。

＊＊＊

新井「先輩！」

町田は我に返る。喉頭鏡を入れ、声帯を確認し、チューブを通す。フラットだった心電図モニターが、ゆっくりと波形を取り戻していく。

医師A「心拍再開です！」

誰も、答えない。

○同・初療室壁（夜）

壁の時計。秒針が、てっぺんを越える。午前零時。日付が変わる。

○同・CT操作室（夜）

撮影された高齢男性のCT画像を見ている町田と新井。

新井「頭、ダメそうですね……」

町田「寝たきりだな……」

○同・ＣＴ室入り口（夜）

ストレッチャーが出てくる。町田は手袋を外す。左手首の、色褪せたミサンガを見つめる。

町田Ｎ「でも――この国の救急医療は、もう、教科書のままじゃ、いられない」

○前田救命センター・ステーション（夜）

デスクの上の電話が鳴る。少し荒げに受話器を取る新井亮（２９）

新井「はい、前田救命センター」

救急隊員（声）「９５男性、そちらの呼吸器内科にかかりつけの患者です。呼吸苦の訴えがあります。受け入れ可能でしょうか？」

新井「ちょっと待ってください」

新井は患者情報をボードに書いて、電

話機の保留ボタンを押し、周囲を見渡す。医療スタッフが忙しそうに働いている。町田翼（３２）が新井の横に現れる。

町田「新井、うちのかかりつけだろ？」

新井「まあそうですけど……」

新井は受話器を耳にあてる。

新井「受け入れます、名前と生年月日お願いしますーー」

新井が電話で救急隊とやりとりを続けている。

○同・初療室前　（夜）

腕を組んで救急車を待っている新井。横に並ぶ町田。

新井「高齢者の搬送ばっかですね……」

町田「まあ、時代が時代だしな」

新井「とは言っても……」

町田「かかりつけの医者が、治療コードの話を全くしたことがない患者さんが多すぎる

……ってことだろ？」

二人が顔を見合わせる。

新井「そう、そこなんです」

T「治療コード：急変の際にどこまで治療をするかという取り決め。たとえば心肺停止の時に心臓マッサージを行うか、行わないかといった治療の選択肢のこと」

新井「こんな状況がこれからもずっと続いていたら、僕らの心身もちませんよ」

ため息をつく新井。

○同・初療室　（夜）

救急隊員が患者である高齢患者B（95）を連れて初療室のベッドに移しかえる。新人看護師（22）が血圧計を巻いて、測定を始める。高井玲奈（30）が新井と町田のほうを見る。

玲奈「先生、うちのかかりつけみたいだけど治療コードって決まっているの？」

新井、パソコンでカルテをチェックす

るが、コードの記載は見当たらない。
患者に酸素マスクを取り付けている町田が新井に声をかける。
町田「どう？」
新井「話し合いの形跡ないです……」
新井がうんざりした顔をする。
玲奈「え、フルコードってこと？」
新井「急変の時に、何でもやるってこと。人工呼吸器、心臓マッサージ、電気ショック――全部、いわゆる延命処置だよ」
一瞬静まり返る初療室。落ち着いた口調で町田が口を開く。
町田「人工呼吸器が今必要な状況ではないでしょ。幸い酸素投与で落ち着きそう。新井、ＣＴ室の手配しておいて」
新井は町田の方を見て頷き、患者移動の準備を始める。呼吸状態が落ち着いてきた患者がそばにいる町田の右手を掴む。
高齢患者Ｂ「人工呼吸器とか言ったけどほん

とか……」

町田は患者の掴んだ手を優しく剥がして手を握る。

町田「今はこの酸素マスクがあれば大丈夫です」

高齢男性B「よかった。妻が繋がれて亡くなった……あれは辛かった」

町田の手を両手で握り直す。

町田「すいません、不安にさせて……」

町田も両手で優しく握り返す。

玲奈「CT室の準備できています」

町田「ありがとう。移動頼む」

医者Aと新人看護師が患者を連れていく。町田は、患者が握っていた自身の右手を見つめている。

○前田救命救急センター・医師控室　（朝）

寝落ちしそうな表情で電子カルテの前に座っている新井。新井の頬に冷えた缶コーヒーをあてる町田。

新井「冷たい！　ありがとうございます」

新井が町田を見て軽く会釈する。

町田「徹夜？」

新井「そうですね……」

町田がホワイトボードに書かれてある入院患者のリストを見る。75歳以上の高齢者が8割以上となっている中で、『かかりつけなし、家族連絡なし』の記載がされている何人かの患者がいる。

町田「独居で身寄りがなかったり、身体的不自由で通院困難……。結果としてかかりつけがない人たちも最近増えてきたな……」

新井「医療難民ってやつですよね？」

町田「そうだな」

新井「いざ具合悪くなってから救急車呼んでも手遅れだったり、日頃から健康管理をしていれば防げたかもしれない入院ですよね」

町田が左手に付けているミサンガを見ている。

新井「どうかしました？」

町田「いや、なんでもない」

○商店街・大通り

町田が商店街を歩いている。店の前のベンチに田中徳次郎（８５）が腰掛けている。膝の上に文庫本が置かれているが、目線は通りを見ている。

町田「田中さん」

田中「おお、町田先生。生きていたか」

町田「生きていますよ」

ふっと笑う町田。

重い足取りで店の奥に行く田中。暫くして右手にペットボトルのお茶と個包装の煎餅をもって現れる。

○同・店前ベンチ

田中、煎餅の袋を持つが、指がうまく動かない。町田に袋を渡す。

田中「もう、ここがダメでな」

町田が袋を開けて返す。田中、煎餅を

かじる。咳き込む。

町田「最近、お見かけしませんでした」

田中「ちょっと、入院しとった」

田中「鈴木先生のとこ。外科の」

町田、軽く頷く。

田中「もう、あちこち回っちまっとるみたいでな」

町田と田中の間に沈黙が流れる、通りを一台の自転車が、ゆっくり通り過ぎる。

田中「正直な、先生。もう、入院はこりごりだ」

田中「昔は、肺炎で死にかけても、起き上がれた。今はもう、起き上がるのもしんどい」

田中「管に繋がれて、あんなふうには、なりたくないんだ」

町田「……」

町田、田中の横顔を見る。田中は町田を見ずにお茶を一口飲む。

田中「二年前は、ありがとな」

町田「……」

風が吹く。町田の左手首の、色褪せたミサンガが揺れる。

○同・救命センター部長室

八木直久（５０）が椅子に座っており、机を挟んで町田が立っている。

八木「町田、話があるって？」

町田「部長、半ば愚痴になるかも知れませんが……」

八木「なんだ」

町田、軽く息を吸う。

町田「先週から今週で、私が挿管した患者六人。そのうち治療コードが事前に決まっていたのは、ゼロです」

八木「……」

町田「先週、９５歳の男性。奥さんが繋がれて亡くなったのが辛かったと、私の手を握って言いました。幸い、その時は酸素マスクで保てました……。でも彼が思いを伝え

られないくらい重症だったら、私は、あの患者さんの一番嫌がっていたことを、していました」

八木、町田の目を見る。

八木「お前、それを、何回経験した？」

町田「……」

八木「なあ、町田」

八木、椅子の背にもたれる。

高齢化社会について扱った新聞記事にちらっと目をやる。

八木「いつからかな。気づいたら、毎晩、ストレッチャーで運ばれてくるのは、おじいちゃんと、おばあちゃんだ」

町田「……」

八木「お前が辛いのは、わかる。俺も、辛い」

机の上の、八木のマグカップ。冷めたコーヒーの表面が、わずかに揺れている。

八木「……ところで町田、専門医取って数年になるけど、この後進みたい道とかあるの

か？」

町田「……まだ、決まっていません」

ポケットに入っていた院内ピッチが鳴り電話に出る町田。八木に軽く会釈して、部長室を出ていく。

八木は町田の出ていったドアを、じっと見ている。

T「数日後」

○前田救命救急センター・ステーション（夜）

ナースステーションに集まっている医師A、看護師A、新井、玲奈の4人。電子カルテを前に何やら不安げな表情の四人。そこに町田がやってくる。

町田「どうした？」

新井「受け入れ要請があって、85歳男性の患者なんですけど。酸素投与では保てなさそうな呼吸状態なんです」

玲奈「この患者さん、外科部長の鈴木先生の患者で、ステージ4の肺がん末期なんです

けど、治療コードの話し合いがされてなさそうで……」

町田が救急隊からの情報が書かれたボードの用紙を見る。患者名に田中徳次郎と書かれている。

町田「新井、ハイフローの準備頼む。高井さん、レントゲンとCTいつでも取れる様に手配お願いします」

新井と玲奈が町田を見て頷く。

町田「治療方針は俺が家族と話すよ」

○同・初療室　（夜）

救急隊が田中徳次郎（85）を運んでくる。初療室のベッドに移される田中。かなりの頻呼吸で顔にはびっしょり汗をかいており、苦しくて会話ができない様子。新人看護師が血圧測定や酸素飽和度の測定を行う。

玲奈「先生、リザーバー15Lで酸素飽和度

８０％しかないです」

新井「ハイフロー装着しましょう」

町田「家族は？」

玲奈「次女さんが来ています」

○同・面談室　（夜）

町田と田中の次女である田中良子（４５）が机を挟んで座っている。

良子「先生、父は助かるんですか？」

町田「いま懸命に治療しています。何かお父様の体のことで聞いていますか？」

良子「長女が病院に連れてっているんですけど、肺がんで全身に転移しているって……。でも主治医の先生からはここ最近は安定しているって……」

町田「お父様はおっしゃる通り肺がんで全身にもガンが転移しています。一見安定していそうでもぎりぎりの状態で生活されていたかもしれません」

町田「このような形で急に具合が悪くなった

際の治療について話し合ったことはありますか？たとえば人工呼吸器の話とか？」

良子「長女からはなにも聞いてません……」

町田「長女様はいまどちらに？」

良子「出張中でさっき連絡したら朝一で戻ってくるって」

町田「少し長女様と連絡取ってみていいですか？電話番号教えてください」

良子「はい、こちらです」

町田は長女の電話番号に院内ピッチから掛けるが繋がらない。面談室のドアが開き、新井が現れる。

新井「町田先生、ちょっと」

町田「すいません、一旦失礼します」

軽く良子に頭を下げ面談室を出る町田。面談室のドアを閉めて新井の顔をみる。

町田「どうした？」

新井「ハイフローでも呼吸不全が進行してます。このままだともたないですよ。救命のためには人工呼吸のサポートが必要だと思

います、でも……」

町田「……ちょっと待ってて」

再度面談室のドアを開け、中に入る町田。軽く息を吸う。

町田「良子さん、落ち着いて聞いてください。お父様の呼吸状態はいまかなり悪くて命が危険な状態です。救命のためには人工呼吸器のサポートが必要な状況です」

町田「ただ、お父様の状態からは一度人工呼吸器を装着してしまうと、残りの人生は管が繋がったまま一生を終えてしまう可能性が高い」

町田「そのような人生の結末をお父様は望んではいないのではないでしょうか？」

＊＊＊

（フラッシュ）

田中「管に繋がれて、あんなふうには、なりたくないんだ」

＊＊＊

良子「そんなの……いきなり言われてもわか

んないです。お父さん助けてください」

町田「お父様の今後のお姿を考えると人工呼吸はおすすめできません。呼吸苦を緩和する治療もーーー」

俯き気味だった良子が顔をあげて町田の言葉を遮る。

良子「先生は父を見捨てるのですか？」

町田「そうは言っていません」

良子「だったら助けてください。二年前は助けてくれたじゃないですか！」

良子は町田に向かって泣きながら頭を何回も下げる。

○同・初療室　（夜）

軽く俯きながら足取り重く入ってくる町田。深く息を吸う。

新井「先輩？」

町田「新井……人工呼吸器につなげる」

一同驚いた表情で町田をみる。数秒間の沈黙が流れる。

玲奈「患者さん肺がん末期じゃないんですか？」

町田「そうだよ……」

新井「延命処置ってことですか、先輩？」

町田「家族と話し合って救命を優先することになった、フルコードだ」

○同・集中治療室（朝）

人工呼吸器に繋がれた徳次郎。首や手には点滴の管がつながっている。酸素飽和度のアラームが鳴る。突如モニターの心拍数が徐々に落ちていく。気づいた玲奈が慌てて徳次郎の首に手を触れ、脈が触れないことを確認する。

玲奈「ドクターコールお願い、心停止！」

玲奈が患者の心臓マッサージを始める。医師B（２６）、看護師B（２３）が駆けつける。新井と町田が勢いよく入ってくる。

町田「どうした？」

玲奈「１分前に心停止」

新井「初期波形は？」

玲奈「ＰＥＡ」

町田「わかった。俺は気道側に回って指揮を取る。新井、原因検索を頼む。高井さんアドレナリン１Ａｉｖして」

懸命な蘇生が続けられている。壁の時計の針が十分経過する。

町田「新井どうだ？」

新井がエコーを心臓にあてる。町田の顔がこわばる。

町田「・・・肺塞栓？」

新井「心停止原因だとしたら……」

町田「厳しいな……」

顔を見合わせる町田、新井。玲奈がカーテンを開けて入ってくる。

玲奈「家族来てるわ」

町田「入れてくれ……」

玲奈に案内されて長女の慶子（５０）と次女の良子が入ってくる。慶子は出

張帰りのスーツ姿。キャリーケースが、廊下に置き去りにされている。

複数の管に繋がれた徳次郎が心臓マッサージを施されている。立ち止まる慶子。

慶子「……お父さん？」

徳次郎の口元から、人工呼吸器の管が出ている。心臓マッサージで、徳次郎の身体が、上下する。

慶子「お父さん」

慶子の足が動かない。

良子「お姉ちゃん」

慶子、ようやく数歩進む。町田、慶子に向き直る。

町田「懸命な蘇生処置をしてますが――」

慶子「（町田を見ずに）……お父さん」

町田、言葉を失う。

慶子、徳次郎の顔の横に立つ。徳次郎の頬に、そっと手を当てようとして、管に阻まれる。手が宙で止まる。

慶子「……朝、電話したのに」

町田の顔を見る慶子。

慶子「朝、電話したんです」

町田「はい」

慶子「出なかった。お父さん、いつも、すぐ出るのに」

慶子の目に、涙が浮かぶ。だが、まだ落ちない。

慶子「……良子、どうして人工呼吸器、つけたの？」

良子「お姉ちゃん、それは――」

慶子「お父さん、嫌がってたのに……」

良子、息を呑む。

良子「……知らなかった。私、知らなかった、そんなの」

慶子、ふらつく。町田、思わず手を出すが、慶子は壁に手をついて自分で支える。

慶子「先生。お父さん、いつも、外来、私が連れて行ってたんです」

町田「……」

慶子「鈴木先生のとこ。タクシー使うのが、もったいないって言うから、バスで」

慶子「最近、バス停まで歩くのも、しんどそうで」

慶子「先月、私、言ったんです。お父さん、無理しないでって。そしたら、あの人、何て言ったと思います？」

町田「……」

慶子『もう、頑張りたくない』って」

慶子の頬に、涙が落ちる。

慶子「私、聞いたのに。聞いたのに、流したんです」

慶子、その場に膝から崩れ落ちる。

慶子「（嗚咽）聞いたのに……お父さん、ごめん。お父さん、ごめん」

良子、姉の肩に手を置こうとして、できない。良子も、泣き始める。

良子「お姉ちゃん、ごめん。私、夜、先生に、助けてくださいって、言っちゃった……」

慶子「……」

良子「だって、二年前、助けてもらったから。私、二年前と、同じだと、思ったの」

慶子、良子を見る。姉妹の目が合う。

慶子「（声を絞り出す）良子、あんた、悪くないよ」

良子、泣き崩れる。

慶子、徳次郎を見上げる。心臓マッサージは、まだ続いている。

慶子「……もう、いいです」

蘇生メンバーの手が、止まらない。

慶子「先生。お父さん、もう、いいです」

町田、新井を見る。新井、頷く。町田、蘇生メンバーに目で合図する。心臓マッサージが止まる。モニターのフラットな電子音だけが、病室に響く。

慶子「お父さん」

慶子、徳次郎の手を握る。

慶子「お疲れさま」

立ち尽くしている町田。新井がおそる

おそる声をかける。町田は深く頭を下げ、カーテンを開けて病室から無言で出る。

○同・医師控室（朝）

町田は椅子に腰掛け、下を向いている。新井が、町田の目の前にコーヒーが入った紙コップを置く。

町田「ありがとう」

新井「先輩、全然悪くないですよ。あんなギリギリで生活していた患者に治療コードを詰めない外科が――」

町田「新井」

新井の言葉を目で制する町田。町田の視線の先には、黒いスクラブの上から白衣を着ている外科部長の鈴木健（52）が立っている。緑の手術着姿の外科医A（36）とB（34）が部長の後ろに立っている。

町田「鈴木先生」

鈴木、控室に入ってくる。町田が立ち上がる。

鈴木「町田先生」

町田「お疲れ様です」

鈴木、町田の前のコーヒーを見る。

鈴木「冷めるよ。飲んで」

町田、戸惑いながら、コーヒーを一口飲む。鈴木がそれを見ている。

鈴木「結果、聞いたよ」

町田「……力及ばず、申し訳ありませんでした」

鈴木「ご苦労さん」

町田、鈴木の目を見る。鈴木の表情は、読めない。

鈴木「長女さんにも会った。次女さんと話して、人工呼吸器を、つけたって？」

町田「……はい」

二人の間に数秒間の沈黙が流れる。

鈴木「町田先生。うちの患者だよ。田中さんは、うちの患者だ。私の、患者だ」

外科医A・Bが、部長の後ろで気まずそうに目を伏せる。

鈴木「次女さんは、家族の代表として、あの場で署名する立場にあったのか？」

町田「……」

鈴木「答えなくていい」

鈴木「答えなくていいけど、救急医の先生のエゴでは、ないよね？」

町田の右手が震え、握っていた紙コップがグシャッと潰れる。こぼれたコーヒーが、机に染みていく。

町田、目の奥に怒りを灯しながら鈴木の目を見る。

町田「お言葉ですが……先生方、主治医の先生方が、彼のような患者の治療コードを、事前にお話しになっていないから、今回のような問題が起こるのではないですか？」

新井「先輩……」

新井が町田の左手を掴むが、町田は振り払う。鈴木は黙って聞いている。

町田「僕ら救急医は、先生方の尻拭いではありません。失礼します」

町田、鈴木の横をすり抜けて、出ていこうとする。

鈴木「町田先生」

足を止める町田。だが、振り返らない。

鈴木「……」

鈴木、何か言いかけて、やめる。

鈴木「いや、いい。お疲れさん」

町田、無言で出ていく。新井、外科医らに軽く会釈して、町田の後ろを追う。

控室に残された鈴木と、外科医二人。

外科医A「部長、よろしいんですか、あんな言われ方をして」

鈴木、町田が出ていったドアを見ている。

外科医B「次の症例、準備できています」

外科医Bからアイパッドを受け取り、新規タブから田中徳次郎のカルテを開く鈴木。治療コードの欄が空白になっ

ている。無言で画面を見ていた鈴木が。
視線を自身の右手に移す。

○町田自宅・外観（朝）
静寂の中で小鳥のさえずりが響いている。

○町田自宅・居間　（昼）
買い込んだ缶ビールやスナック菓子が袋いっぱい居間の机に置かれている。
数個の空き缶が机の上に散らばっている。ベッドの上で寝ている町田。

○前田救命救急センター・ステーション
新井がパソコンの前に座っている。勤務予定表が貼られているボードをみている玲奈。

玲奈「町田先生は？　シフト表に名前がないんだけど……」

新井「一週間休暇だそうです」

玲奈「あの仕事大好きな町田先生が？」

新井「部長に聞いたら、有給溜まりすぎていたから、しぶしぶ取らせたって」

○町田自宅・居間　（夕方）

町田が部屋を掃除していると、棚から一枚の色紙が落ちてくる。落ちてきた色紙に目をやるが、大学サークル時代のものだとわかると気に止めず、棚に戻す。町田のスマホに新井から着信が鳴る。

○居酒屋・団体席（夜）

室内に入るため、暖簾をくぐる町田。中では新井、島崎、医師A、新人看護師が盛り上がっている。

島崎「町田先輩、お久しぶりです」

ビールの生ジョッキを渡される町田。

新井「休暇中の町田先生に乾杯！」

ビールを一気に飲み干す町田。

○同・カウンター席（夜）

町田が一人カウンターに座っている。

目の前に焼酎の瓶が置いてある。一人、

粛々と焼酎の水割りを飲む町田。

新井が町田の左隣に座る。酔っている。

新井「せんぱーい、お疲れ様っす」

町田、グラスを少し持ち上げる。

新井「相変わらず、酒、強いっすね」

町田「……」

新井、カウンターに肘をつく。

新井「先輩……俺、辞めようかな」

町田、新井を見る。

新井「うそです」

町田「なんだ、冗談かよ」

新井「うそじゃないかも」

町田、新井のグラスにビールを注ぐ。

新井「先輩がいるから、俺、続けられてるみたいなとこ、あるんすよ」

町田、苦笑する。

町田「重いな」

新井「重いっすよね」

二人が顔を見合わせて笑う。

新井「先輩、戻ってきてくださいね。ちゃんと、戻ってきてくださいね」

町田「ああ」

新井、カウンターに突っ伏す。すぐに寝息を立て始める。

島崎が新井を抱えて団体席へ戻る。カウンターに残る町田。

○同・玄関（夜）

引き戸が開く。鈴木舞（３２）が入ってくる。仕事帰りで少し疲れている様子。覚知（５０）が声をかける。

覚知「お、舞ちゃん」

舞「まだやってますか？」

舞、店内を見渡す。団体席の賑わい。カウンターの一番奥に、一人で座る男の背中が見える。

○同・カウンター席（夜）

舞がその背中に気づかず、カウンターの手前に座ろうとする。

覚知「親父さん、元気？」

舞「……まあまあです」

覚知、舞の前に生ビールを置く。

覚知「お通し、いつもの？」

舞「お願いします」

舞、ビールを一口飲む。息を吐く。ジョッキを口に運ぼうとして、誤って倒してしまう。ジョッキの中の氷が、カウンターを滑って町田の方へ転がっていく。

覚知「すいません、お客さん」

町田「大丈夫です」

舞「すいません、自分も手が滑ってしまって」

思わず目があう町田と舞。

お互いの顔を数秒見つめている。

舞「町田先生？」

町田「鈴木？」

新井が現れ、町田に肩を組む。

新井「先輩、二次会カラオケです」

新井が横にいる舞を見る。

新井「先輩のお知り合いですか？」

舞「大学のサークルの同期です」

新井「そうなんすか……じゃあゆっくり積もる話でもしてください」

新井をはじめ、飲み会のメンバーは店の外へ出ていく。

舞「町田先生、私の卒業式以来よね？」

町田「ああ、サークルの追いコンだったけ？懐かしいね」

舞「町田先生、今どこで働いているの？」

町田「前田救命センターで救急医をしている」

舞「すごいじゃん、私のお父さんもその病院で働いている。偶然だね」

町田「お父さんって、鈴木健先生？」

舞「そう」

思わず噎せる町田。

町田「あ、お父さん最近なんか言っていた？」
舞「特に何も言ってなかったけど、どうかした？」

○同・カウンター席（夜）

町田と舞が話している。

舞「へぇ、そんなことあったんだ……」
町田「そうなんよ」
舞「気にしないで。患者さんと向き合って治療コードを決めていないお父さんが悪いと思う」

ジョッキを机に置く舞。

町田「鈴木はどうして訪問看護師になろうと思ったの？」
舞「元は外科病棟で働いていて、私の受け持ちに森田さんって患者がいたの……料理人の人」

T「六年前」
（回想はじめ）

○外科病棟・病室

ベッドの上で、痩せている森田（５０）が寝ている。点滴のスタンドの影が、白い壁に落ちている。

○同・廊下

鈴木舞（２６）が小走りで病室へ向かう。

○同・病室

舞が病室に入ってくる。

舞「森田さん、どうしました？」

森田、ベッドの下に手を伸ばそうとしているが届かない。

森田「……すまん」

舞、すぐに屈んで、ベッドの下を覗く。一枚の写真が落ちている。舞、写真を拾い上げる。

若い頃の森田と、女の子（２）。森田はコック服。舞は写真を森田に手渡す。

森田「……ありがとな」

舞、ベッドサイドに椅子を引いて座る。

森田「娘。もう、いい歳になっとる」

舞、何も言わない。

森田「来週、こっちに帰ってくるんだ。成人式」

舞「お祝いですね」

森田「ああ」

森田、写真を見ている。

森田「……鈴木さん。俺、家、帰れるかな」

舞、森田を見る。

森田「いや、退院じゃなくていい。一日でいいから、家に帰って……何か、作りたいんだ。あいつに、一回だけ、手料理、食わせてやりたい」

舞、写真の中の子供を見る。

舞「主治医の先生に、相談してみます」

森田「……すまん」

舞「謝らないでください」

森田は笑う。笑った時、森田の顔は、

写真の中の若いコックの顔と、少しだけ重なる。

○同・病室（夕）

森田、ベッドで寝ている。舞、入ってくる。

森田「鈴木さん」

舞、森田の枕元に立つ。

舞「……森田さん」

舞、何かを言いかけて、止める。森田、舞の表情を見る。

森田「……そうか」

舞「すいません」

森田「いや。鈴木さんが、悪いんじゃない」

森田、写真を胸の上に置く。

森田「鈴木さん。成人式の日、一緒に、写真、見てくれるか？」

（回想終わり）

○居酒屋・カウンター席（夜）

舞、ビールのジョッキを置く。

舞「成人式の前日に、亡くなった」

町田「……」

舞「写真、見れなかった」

数秒間の沈黙が流れる。

舞「私、それから、考えるようになったの」

舞、町田を見る。

舞「医療って、なんなんだろうって」

町田は黙っている。

舞、カバンの中から一枚の名刺を出す。

机の上に、そっと置く。「村井訪問診療所」と書かれている。町田が名刺を見る。

町田「訪問診療？」

舞「色々な事情で、病院に来られない人のところに、こっちから行くの」

舞「治療コードも含めて、自分が主治医だったら何かできることがあるはずって、町田先生の顔に、書いてあった」

ハッとした表情を浮かべる町田。

舞、町田を見る。

舞「医療が、患者の人生を決める」

町田「……」

舞「それが、当たり前だったと思う」

舞「でも――」

舞、町田の目を見る。

舞「患者の人生で、医療を決める」

舞「そういう、世界もある」

町田は名刺に、目をやる。名刺の文字が揺れて見える。

○商店街・アーケード出口（夜）

町田はスマホの画面を見ながらアーケードの出口を出て住宅街に入る。

町田は足元にプラスチックのネームプレートが落ちているのに気づく。『村井訪問診療所　アシスタント（看護師）金城恵』と書かれている。

○村井診療所・外観

町田の目の前に古いプレハブが建っている。『村井訪問診療所』と書いてある立札。村の表記に違和感を覚え数秒間、看板を見つめる。少し首を傾げながら玄関に向かう町田。

○同・玄関前

玄関の前にある呼び鈴を鳴らす町田。

金城（声）「はい、村井訪問診療所です」

町田「すいません、落とし物届けにました、町田と言います」

玄関の扉が開く。町田の前に金城恵（３６）が立っている。

町田「すいません、昨日夜に拾ったんですけど……」

ポケットからネームプレートを出し、金城に見せる町田。

金城「探していたの。ありがとう」

町田が金城を見て軽く頷く。

金城「ごめんね、わざわざ届けにきてくれて」
町田「いえいえ」
舞「金城さん、頼んでいた点滴ってこれでしたっけ？」
点滴類が入った段ボールを抱えて玄関に姿をみせる舞。目があう町田と舞。
舞「町田先生」
町田「おう……」
町田は舞に軽く合図を送る。
金城「無くしたネームプレート、届けに来てくれたの。舞ちゃんの知り合い？」
舞「大学の時のサークル同期で、今は前田救命センターの救急医なんです」

○村井訪問診療所・応接室（昼）
ソファーに座っている町田。金城が机の上にお茶とお菓子を置く。
金城「ごめんね、こんなものしかないけど」
町田「いえいえ。すいませんわざわざ……」
金城「救急医って忙しくて大変よね。今日は

お休み？」

町田「今、休暇中で……」

金城「うちは病院みたいに大掛かりな手術や処置はできないから、救急医の町田先生からしたら地味かもしれないけど……」

町田「そんなことないですよ」

町田が診療所の内観を見渡す。壁に飾っている患者からの感謝の手紙や品が目に留まる。点滴の入った段ボールを運んでいる舞。

舞「町田先生も、いろいろあるみたいだし、一度、訪問診療の見学してもらったらどうですか？」

金城「いろいろあるの？」

町田が発言を遮るような鋭い視線で舞の方を見る。

町田「鈴木」

舞「ごめん、つい……」

金城「院長も大歓迎だと思うよ」

町田「休みとはいえ、勉強しないといけない

ことも多いんで。僕はこれで失礼します。
ご馳走様でした」
軽く会釈して玄関の扉を開けて出ていく町田。

○町田宅・居間（夕）
町田が缶ビールを片手に居間に入ってくる。つけっぱなしだったＴＶに目をやる。

○テレビ局スタジオ（夕）
訪問診療医（５０）が話している。
訪問診療医「医療難民がさらに増え、医療の場が自宅や施設になっていく患者さんが、増えていくでしょうね」

○同・居間（夕）
町田、缶ビールを口に運ぼうとして、止まる。

訪問診療医（声）「在宅で、最期まで、その人らしく過ごす――そういう選択肢が、これからの日本には、必要なんじゃないでしょうか」

○同・居間（夕）

テレビを見ている町田が缶ビールを、机に置く。町田が棚に目をやる。バドミントンのラケットの側の一枚の色紙が落ちる。町田、立ち上がって色紙を拾う。大学サークル時代の寄せ書き。「町田先輩へ」「医者頑張ってください」若い字で書かれた言葉。その中に「町田くんへ　患者の幸せを考えられるような立派なお医者さんになってね　鈴木舞」の文字。町田の手が止まり、左手首のミサンガに視線をやる。

（回想はじめ　十五年前）

○町田実家・居間（朝）

台所で、町田亜由美（４０）が食事を作っている。壁際に、在宅酸素の機械。透明なチューブが、亜由美の鼻に繋がっている。町田翼（１７）が参考書を抱えてダイニングへ。

亜由美「翼、ご飯」

町田「いらない、模試だから」

亜由美「食べていきなさい」

町田「時間ない」

亜由美、咳き込む。深く、止まらない咳。町田が立ち止まる。亜由美は咳の合間に笑う。

亜由美「……平気」

町田、亜由美の背中をさする。

亜由美「翼、模試頑張ってきて。合格したら、お母さん、一緒にお祝いね」

町田「うん」

亜由美、エプロンのポケットから何かを取り出す。編んだ細い赤い紐のミサンガ。

亜由美「お守り」

町田「……いらないよ。いきなりどうしたのって言われる」

恥ずかしそうな表情の町田はミサンガをテーブルの上に置く。亜由美はミサンガを手に取り、町田の左手首を、自分の手でそっと包む。町田は亜由美の顔を見る。亜由美の目は、少しだけ濡れている。

亜由美「翼が、立派なお医者さんになるまで……お母さん、頑張るね」

町田「……」

町田は玄関へ向かう。台所で亜由美が、再び咳き込んでいる。

亜由美「早く、行きなさい」

町田は頷いて、出ていく。

○学校・校門（午後）

町田は模試を終えて校門を出る。ポケットの携帯が鳴る。

町田「もしもし」

ケン（声）「町田翼くん？　お母さんが――」

町田の顔色が、変わる。

○前田救命センター・集中治療室（夕）

人工呼吸器を付けた亜由美がベッドに横たわっている。青ざめた顔。

ケン（５０）が、町田を案内してくる。

ケン「呼吸不全で、心臓が止まる寸前だった。なんとか今は落ち着いている」

町田、ベッドサイドに立ち尽くす。

ケン「お母さんが、肺の難病を患っていることは？」

町田、頷く。

ケン「お母さんの体じゃ、外来通うのも負担になる。せめて、早めに薬を出せる環境があればな……」

ケンが、ポケットから何かを取り出す。赤いミサンガ。少し汚れている。

ケン「搬送中、お母さんが、握ってた」

町田、ミサンガを受け取る。両手で、握りしめる。

ケン「息子さんの名前、ずっと呼んでたそうだ」

町田の頬に、涙が落ちる。

町田「……母は、母は、助かりますか？」

ケン、町田を見る。

ケン「……始まったばかりだから。今は、そばにいてあげな」

町田、亜由美の手を握る。亜由美の手は温かい。だが、亜由美は、目を開けない。

（回想終わり）

○町田宅・居間（夕）

町田、ミサンガを見ている。テレビから、訪問診療医の声が続いている。

訪問診療医（声）「病院じゃ、できないことが、家には、あるんですよ」

町田は立ち上がり、舞からもらった村

井訪問診療所の名刺を取り出す。

○伊祖療養病院・病室（朝）

町田、病室に入る。亜由美（５５）が、ベッドに横たわっている。スピーチカニューレを装着している。横には人工呼吸器が置かれている。

亜由美、目を開けて、町田を見る。笑う。

町田「母さん」

亜由美、ホワイトボードに、ペンで書く。

亜由美（板書）「仕事、どう？」

町田「……まあまあ」

亜由美（板書）「顔色、悪い」

町田「平気だよ」

亜由美、町田の左手首のミサンガを見る。亜由美が町田の手を、両手で包む。

亜由美（板書）「ありがとう」

町田は亜由美の手を握り返す。

ふと病室内を見渡すと他のベッドにも、人工呼吸器に繋がれた患者たち。

○伊祖療養病院・廊下（朝）

長い廊下。両側にずらりと並ぶ病室。それぞれの病室から、人工呼吸器の規則的な作動音が、漏れ聞こえてくる。廊下を歩いている町田。途中、ある病室の前で足を止める。中で、家族が患者の手を握っている。患者は、目を閉じている。家族は、何も言わない。ただ手を握っている。

○村井診療所・玄関前（朝）

玄関前に立つ町田。右手で呼び鈴を鳴らす。しばらく、応答がない。

町田、もう一度、鳴らそうと手を上げる。そこで止まる。

町田、自分の左手首を見る。色褪せた、赤いミサンガ。

町田N「人を救うこと――それが、僕の仕事だと、教えられてきた」

町田N「でも、僕は今、別の場所に、立っている」

玄関の扉が、内側から開く。

村井正和（50）が、立っている。白衣ではなく、紺色のシンプルなシャツ。右手は、ジーンズのポケットに入っていて見えない。

村井「……町田翼先生」

町田、頭を下げる。

町田「はじめまして。診療見学に来た町田と申します」

村井「うん」

村井、町田を見る。町田の左手首のミサンガに、村井の目が、一瞬、止まる。

村井は目を上げて、町田の目を見る。

村井「君はなんで、ここに来たの？」

町田「えっ？」

村井「いや、別に深い意味はないけどね。ただ、救命センターの先生が、こんなとこに見学に来るのは、珍しいから」

町田「……」

村井「鈴木さんから、紹介を受けたけど、君がなぜ来たかは、君自身が、説明することだ」

町田、村井を見る。村井、表情を変えない。だが、目は、町田を真っ直ぐ見ている。

町田「……人を、救う、ってことが」

村井「うん」

町田「わからなく、なって」

村井、頷く。

村井「そうか」

村井、扉を、もう少し開ける。

村井「入りなさい」

町田、頭を下げて、診療所に入る。

ドアが、閉まる前――村井、自分の右手をポケットから出し、扉のノブを握る。右親指の付け根に古い、白い傷跡。

町田はその傷に、一瞬、目をやる。

ドアが閉まる。

○村井診療所・外観（朝）

古いプレハブの建物。「村井訪問診療所」の立札。朝の光が、看板に当たる。

町田N「その意味を、僕はこれから、知る」

町田N「Cureから、Careへ――僕の、新しい場所で」

（第二話「決意」に続く）